

俺を散々冷遇してた婚約者の王太子が
断罪寸前で溺愛してきた話、聞く？

ステラ

レニオールの再従姉妹で
隣国の第五王女。
ルーリックの双子の妹。
曲がったことが嫌い。

ルーリック

レニオールの再従兄弟で
隣国の第四王子。
レニオールのことが好き。
穏やかで優しい常識人。

マリク

貧乏男爵家の長男。
アーネストとの
関係が噂されていた。
優しくて面倒見がいい。

マーガレット

レニオールの母方の祖母。
隣国の元お姫様。
レニオールを
可愛がっている。

レニオール

公爵家の三男で、
王子アーネストの婚約者。
長年婚約者に冷遇され、
婚約破棄されようと思いつ。
世間知らずでお人好しだが
自覚はない。

アーネスト

王子で、
レニオールの婚約者。
必要があれば
冷酷になれるタイプだが、
レニオール限定で優しく誠実。



◆Characters◆

Ore wo sanzan reigu shiteta
konyakusha no outaishi ga danzai sunzen de
deki ai shitakita hanashi kiku ?

目次

俺を散々冷遇してた婚約者の王太子が
断罪寸前で溺愛してきた話、聞く？

番外編 ひめごとびより

俺を散々冷遇してた婚約者の王太子が
断罪寸前で溺愛してきた話、聞く？

「レニオール・ノクティス！ お前には心底愛想が尽きた！」

それは、夏休み前に学園で行われたダンスパーティーでのことだった。

この国、ハイランド王国の王太子であるアーネストは、学園の生徒会長でもある。壇上で開会の挨拶をするはずの彼は、己の婚約者を壇上に上げてそう高らかに言い放った。

糾弾されている婚約者、レニオール・ノクティスとはまさに俺のこと。ノクティス公爵家の三男であり、訳あつて隣国の王家の血を引いている俺は、六歳の頃からアーネストの婚約者だった。

そんなすごそうな肩書きだけ聞くと、さぞかし見た目もいいんだろう……と思われそうだが、残念ながらそうでもない。身長は百六十センチしかないし、顔立ちもブサイクではないけど目立って美形でもない。唯一の特徴といえば青を含んだ紫色の瞳くらいだが、くすんだ金髪とうつつすらと散るそばかすが、全体的に地味な印象を与える。

対してアーネストは、完璧なイケメン。月の光のような銀髪と、深い海を思わせる群青の瞳。計算されて作られた人形のような美しい顔立ちは、どこか人間味が薄く感じられた。百八十センチを

ゆうに超える長身はよく鍛えられていて、俺と対峙するとまるで大人と子供である。

そんなアーネストの隣にはマリクがいた。マリクは黒目黒髪の少年で、容姿端麗、成績優秀、性格良好と三拍子揃った男爵令息だ。背丈こそ俺とそんなに変わらないが、付属する形容詞がまったく違う。俺は「貧弱」、マリクは「可憐」って感じ。

アーネストの腕にベツタリとくっついているその姿は、コバンザメを彷彿とさせた。唐突に始まった断罪劇に、ステージ下の生徒たちはざわめいている。

（愛想が尽きたは完全にこっちのセリフだけだな！）

俺が内心を隠して表面だけしおらしい顔を作っていると、アーネストは勝ち誇った表情を浮かべた。

（うわあ、殴りてえ〜！）

いい気なものだ。すべて俺の手のひらの上だとはいえ、それはそれとして普通にムカつく。もちろん殴りかかったりはしないし、そうしたところで俺がアーネストに力で敵うわけもないけど……俺がそんなことを考えているとも知らず、アーネストは俺の罪を白日の下に晒しはじめた。

「私の友人であるマリクに対する嫌がらせの数々、知らないとは言わないだろう」

「それは……まことに申し訳ございません」

ちなみに、俺がマリクに嫌がらせをしていたのは本当。それにはいろいろ事情があるんだけど、いじめられたほうにはそんなことは関係ない。マリクのかわいい顔の真ん中には、「デカデカと」さまあみろ」と書かれていた。ほんとに申し訳ない。

「謝って済むことではない！ お前のような穢れた心根の持ち主は、私の婚約者としてふさわしくない。よって——」

（来た……!!）

いよいよ断罪が佳境になり、俺は心の中で快哉を叫んだ。

（神様、本当にありがとう!）

俺は興奮を隠せず、期待のこもった眼差しでアーネストを見つめる。こんなにキラキラした気持ちでこいつを見るのは、初対面以来かもしれない。

「よって……」

待ちきれずにワクワクしている俺の目の前で、アーネストは不意に言葉を詰まらせた。頭の痛みを堪えるように額を押さえて動かないアーネストを、マリクは心配げに見上げている。

「アーネスト様、大丈夫ですか？ ご気分でも……」

マリクがそつと背中をさすつても、アーネストは動かなかった。完全なフリーズ。

（……これ、本当にまじいやつなんじゃないか?）

俺はおずおずとアーネストに近づき、アーネストの顔を覗きこんだ。断罪中に頭に血が上りすぎて卒中とか、さすがに笑えなさすぎる。万が一俺のせいになってしまったら、ほんとにやばい。

アーネストはゆっくりとこっちに視線を向けた。同時に、目にも止まらぬ素早い動きで俺の手を掴む。

そして、ヤツは叫んだ。衆目の前で、腹の底から思い切り。

「レニたん!!!!!!!」

凍り付く会場。呆然とするマリク。恐怖に引きつる俺。

——これが、すべての始まりだった。

第一章 一体どうしてこうなった？

その後、会場は最悪のカオスになった。俺の手をがっちり握ったアーネストは、大興奮でマシンガントークをかます。

「やっぱいい、実物のレニたんまじかわいい。顔ちっちゃ、手すべすべ」

「ア……アーネスト様、正気に戻って！」

絶りついたマリクを、アーネストは手加減なしに腕を振りぬいてぶん投げた。あまりの容赦のなさに、俺は「ヒッ」と声を漏らしてしまう。ステージの端まで放り投げられたマリクは火がついたように泣き、アーネストは硬直している俺に頬ずりしはじめる。

すべてを目撃した生徒たちは、静まり返ってドン引きしていた。それでもアーネストは、周囲のことなど気にも留めない。

「レニたん、レニたん。もう大丈夫。かわいいレニたんを絶対に離さないからね！」

なにが大丈夫なんだ。全然大丈夫じゃねえよ。俺の計画めちゃくちゃだよ。言ってやりたいことは喉の奥で渦巻いていたが、なに一つ言葉にならない。

というのも、俺はこいつが怖かった。唐突すぎる意味不明な言動もそうだが、一番はこいつの目だ。「絶対に離さないからね」と断言したその眼差しには、はつきりとした執着と底知れない闇が

渦巻いていた。その深淵とんがえんを前にして、どんな勇気があれば「俺を断罪するはずだったのでは？」なんて言えるのか。

(なんだこれ。なんなんだよ、マジで)

頭の中で叫びながら、俺はただ頷くことしかできず――

「ワ、ワー……嬉しいいな……アハ、アハハ……」

乾いた声でそう呟くよりほかなかった。

それからどうやって屋敷まで帰ってきたのか、よく覚えていない。

自室で一人きりになり、ふらふらとベッドに倒れこんでようやく、「なんなんだ」という言葉がこぼれ出た。瞬間、今まで燻くすぶっていた感情――混乱、怒り、嘆き。それらすべてが堰せきを切つて溢れ出す。

「ありえないありえないありえない!! なんなんだよあれ!! レニたんってなんだよ! お前が好きなマリクだろ! 婚約してこのかた、かわいいとかいっぺんも言ったことねえだろ! 意味わかんねえ、マジありえない、俺の苦勞どうすんだよ! 婚約破棄できねえじゃん! うっ、う……」
うわーん、と子供のように泣きじゃくった。

どうしてこんなことになってしまったのか。理由は少しもわからないが、一つだけ確かなことがある。それは、俺が一年以上もかけて準備していた計画が、あの瞬間すべて台無しになったということだ。

俺の目的は、ずばりあいつと婚約破棄すること。そのために俺は、やりたくもないマリクいじめを『あえて』やった。アーネストに婚約破棄を言い渡す大義名分を作ってやるために。

お互いが望まない婚約など、普通に解消できればいいのだが、国が絡むとそうはいかない。家臣である公爵家からの解消が難しいのは当然として、王族であるアーネストから婚約解消を言い渡すのも容易ではない。

なぜなら、隣国ファンネの元プリンセスであるおばあさまが、目に入れても痛くないほど俺を溺愛しているからだ。なんの落ち度もない俺に婚約解消を言い渡すものなら、隣国との関係が悪化するのには目に見えている。だから、俺が断罪覚悟で婚約破棄を言い渡す理由を作ってやるしかなかったんだ。

その結果平民に落とされたとしても、教会に入って慎ましく生きていけばいい。そうまで思い切れるのは、俺が王宮でずっと「出来損ないの婚約者」として嫌がらせを受けていたからだ。

そもそもアーネストに一目惚れした俺が、「婚約者になりたい」と願ったから成立した婚約だったということもあり、周囲には最初からよく思われていなかった。そこへ来て、俺が容姿も能力も特に秀でておらず、アーネストにも冷遇されているとなれば、軽んじられても当然だ。

嫌がらせといつても、暴力を振るわれたりはしない。ただ「顔が地味」だの「なんの取り柄もない」だのと悪口を言われたり、根も葉もない噂を流されたり、王宮の廊下を通るたびに声をひそめた笑い声が聞こえてきたり……王太子妃になって王宮で生活するようになったら、そんな日がずっと続くことになる。もしかしたら、使用人にもナメられていじめられてしまうかもしれない。

俺を嫌っているアーネストは当然助けしてくれないだろうし、大好きな家族にも会えない孤独な日々。アーネストは愛するマリクを側室に迎えて子供を作り、俺は白い結婚で肩書きだけの王妃になる——そんな惨めな未来が目に見えぬ。はつきり言って、地獄だ。これを地獄以外のなんと呼ばいいのか、俺の少ない語彙力ではとも思いつかない。そんな人生と比べたら、教会での暮らしはきつと天国だろう。

実際に俺が断罪されたら、きつと家族は悲しむだろうし、王家に抗議や嘆願をしてくれると思う。もしそれが叶わなかったとしても、楽に暮らせる環境を用意してくれるだろうが、それによって断罪した王家から睨まれることになる。そんなことになるくらいなら、俺は黙って表舞台から消えたい。俺が望んで結んだ婚約だ。自分のしたことの責任くらいはちゃんと取らなくては。

そう思って始めた計画だったが、気づけば三年生の夏を迎えていた。来年学園を卒業したら、正式にあいつと結婚することが決まっている。もう時間がない。だからこそ、あのダンスパーティーで断罪されることに賭けていたのに。

今思い出しても、今日のアーネストは普通じゃなかった。「レニたん」なんて呼び名、天地がひっくり返ったってあいつが思いつくわけがない。

きつと、なにかの間違いだ。一晚寝たら、あいつもきつと正気に戻る。そしたら自分がちよっとおかしくなっていたことに気づくはずだ。気づいてほしい。そうでなきゃ困る。心配する世話役の声も耳に入らず、俺はそのままベッドに突っ伏して泣き続けた。

翌朝、俺のそんな願いを嘲笑^{あざわら}うかのように、事件は起きた。

ヤツが来たのだ。俺の婚約者様、アーネストが。

両親や使用人は、婚約者の初訪問を大喜びで歓迎したが、俺は血の気が引いた。なにを暢^{のん}気に喜んでいるのか、まったく理解できない。アポなし訪問なんて王族がすることじゃないし、婚約して十一年間、訪問どころか花一輪だって贈られたことがないんだぞ。そんな冷え切った関係の婚約者が、大きな花束を抱え、別人のように晴れやかな笑顔でやってきたのだ。

「う、嘘だ。これは夢だ。まだ目が覚めてないだけなんだ……」

ガタガタ震えながら呟く俺に、なにも知らないばあやは「夢じゃありませんよ。よかったですね、坊ちゃんま」なんて言っていて涙ぐんでいる。俺は恐怖を堪えて、そろそろとアーネストを見た。目が合う。

「ヒッ」

怖い、怖い。めっちゃガン見されてる。やめろ、こつち見んな。

「おはよう」

俺が全力で拒絶しているというのに、アーネストは笑顔を輝かせ、爽やかに挨拶なんぞしてきた。

「お、おはようございます。アーネスト様」

朝の挨拶をする。たったそれだけのことなのに、全身の震えが止まらない。だって婚約してこのかた、こいつが俺に挨拶した回数なんて片手で足りる。不機嫌そうに眉を寄せて無視されるのが常なんだぞ。それが、満面の笑顔で挨拶してくるなんて、なにかの陰謀としか思えない。怖いよ

お……!!

「大丈夫？ 肌寒いのかな」

怯^{おび}えてハムスターのように震えている俺に、アーネストはなにを勘違いしたのか自分の上着をかけてきたりして、俺の震えはますます大きくなる。もうやめて、俺のライフはゼロだよ……!!

「まあ、レニオールったら。よつぽど嬉しいのねえ」

「おお、いけませんな。こんなところでお待ちして申し訳ございません。ささ、どうぞ中へ」

やめてくれ、震えの原因を俺の安全地帯に招き入れないで。アーネストは今すぐ帰ってどうぞ。アーネストは俺にとつてはクソ野郎でも王太子としては勤勉で、常に大量の仕事を抱えている。つまり、めちゃくちゃ多忙。昨日の乱心を取り繕うためにやってきただけで、ゆっくりお茶するよな時間なんてないはず……そうだよな？

「ああ、突然来たのにすまない。俺のかわいいアイリスに、どうしても会いたくなってしまったね」

そう言って微笑むアーネストに両親はますますニッコニコ。俺は震えが天元突破して鳥肌が立った。

ちなみにコイツが言うアイリスとは俺のこと……だと思っ、多分。今まで一度も言われたことないから知らんけど。おそらく、俺の目の色を花にたとえたのだろう。

まだコイツに惚れていた黒歴史時代の俺なら胸をときめかせたんだろうが、今となつてはドン引きでしかない。逃げ出すわけにもいかず、せめて離れて歩こうとしていた俺の腰に、素早くアーネ

ストが手を回す。

「ヒイツ」

目にも留まらぬ速さ……！！

全力で振り払ってやりたいが、至近距離まで引き寄せてこちらを見下ろしてくる笑顔が恐ろしくて、そんな勇氣はない。俺は弱い。

「レニたんのお家初訪問で、お茶デート……マジ最高すぎ」

ボソッと呟かれた言葉は、きつと幻聴に違いない。俺はなにも聞かなかったことにして、静かにそのまま連行されていった。

サロンに着いたはいいものの、両親はたった五分で席を立ってしまった。気を遣ったつもりだろうが、とんだありがた迷惑だ。

なぜに神は俺にこんな試練を与えるのか。教会に入ったら真面目にお祈りするつもりで信心深……くはないが、そこそこ真面目に戒律は守る気はある俺に、塩対応すぎる。

二人が退室してしまったら、実質この部屋には俺とアーネストの二人きり。もちろん、護衛やメイドなんかの使用人は控えているけど、それだって俺とアーネストの身分からしたらごく少ない人数と言える。その上、この手の職種の方々は職務中壁同然に振る舞うのが基本で、俺たち貴族階級からすると、その場においても『いない』も同然。つまりなにが言いたいかっていうと……

「レニたん、このお菓子、好きでしょ？ ほら、あーんして」

「いや、人の目がありますので」

「……………？ 俺とレニたん以外には誰もいないよ？」

これこれ、これですよ！ 使用人は『人目』の中にカウントされねーの！ たとえコイツが俺にセクハラまがいの羞恥プレイを仕掛けてこようと、なんの抑止力にもならない。アーネストが俺の婚約者で成人間近なことを考えれば、よっぽどの無体を働かない限り問題ナシと判断されてしまう。(落ち着け、俺。相手のペースに吞まれるな。打開策を考えるんだ)

俺は口に突っこまれた菓子を咀嚼しながら、なんとかして現実^{あらが}に抗^{すべ}う術がないか、考えを巡らせていた。確かに俺への態度は少しおかしいが、両親への対応は王太子としてなら問題ない。むしろ無表情が改善されて前より感じがよくなっているぐらいだ。

だから、俺への謎の執着さえなくなれば、すべては元通り。俺は晴れてコイツとおさらばして教会入り。アーネストはマリクと手を取り合って、立派な王様になる。そんなハッピーな未来を目指すのだ。そのためにはまず、昨日コイツになにが起こったのかを探らねば。

「アーネスト様、昨日から一体どうなされたんですか？」

「どうなさったって、なにが？」

ニコニコしながら質問に質問で返すアーネストに苛立ちつつも、俺は愛想笑いを浮かべる。なんのこれしき。コイツにイラつかされるのだけは慣れている。

「なにかもです。私がマリクにしたこと、お怒りではなかったのですか？」

めっちゃキレてた。穢れた心根の持ち主とか言つてよ。俺に長年暴言吐きまくって、婚約者

がいる身で他の男とイチャつきまくっていたようなヤツになに言われたって、痛くもかゆくもないけど。

それはともかく、俺がマリクに嫌がらせをしていたのは正真正銘百パーセント真実なので、そこを忘れちゃ耐えてたマリクも可哀想ってもんだ。嫌がらせするようなヤツ、嫌だろ？ 嫌いになるだろ？ 頼むからなっしてくれ。

「大丈夫、全然怒ってないよ。ちょっとした行き違いの末の不幸な出来事だったよね」
俺の祈りは露ほども神に届かず、アーネストは慈愛さえ感じる笑顔でそう言った。

ちょっととした行き違いってなんだ。お前の俺への長年の最悪な態度も、マリクとの浮気も、俺がマリクにした嫌がらせも全部真実で、行き違いなんて起こりようがないだろ。

「行き違い、って……えーと、具体的にどのあたりが」

「レニたんは、俺をマリクに取られたと思っただけ嫉妬したから、ついマリクに意地悪しちゃったんだよね。でも、安心して。俺とマリクはそういうんじゃないから」

「ブブー、不正解です！ 嫉妬なんかこれっぽっちもしてないし、なんならお前と婚約破棄するためだけに、わざわざ嫌がらせしてたんですよー！ ……って言いてえ〜〜!!」

「でも、それならなおさら私がしたことは許されません。なんの罪もないマリクに繰り返しひどいことをしてしまっただけ……こんな心根の穢れた人間より、能力も容姿も優れたマリクのほうがアーネスト様にふさわしいと思います」

これは本当。マリクは、容姿はもちろん頭もいい。男爵家だから高等教育なんて受けていないは

ずなのに、いつもテストで上位五位以内にランクインしてる。……まあ、婚約者がいる王族に遠慮せず接近しちゃって、『なんの罪もない』かどうかって言われると、ちょっと微妙だけど。

対して俺はというと、寝ないで頑張ってもギリギリ四十位に入るかどうかという成績で、顔面に至っては比べるのも烏澁おそがましい。

「そんなことないよ、レニたんの吊り目がちで猫みたいな目とか、ちょっとボンヤリしてるどころとか、うっすらあるそばかすとか、最高にかわいい。マリクは確かに見た目はいいけど、俺の好みじゃない。俺は絶対にレニたんとは結婚するって決めてるから」

「ひええ……」

「それにレニたんは心根が穢れてなんかない！ いつも健気で努力家だし、基本優しいから嫌がらせだつてぬるいことしかできてないし」

（なんだってー！）

それは聞き捨てならない。俺がどれだけ心を鬼にして頑張っていたと思ってるんだ。これに関しては異議を申し立てるぞ！

「そんなことありません。ちゃんとひどいことをしました！」

裕福じゃないマリクにとつて大切な教科書を破いたり、下駄箱に入っている手紙を勝手に捨てたり、立候補した委員になれないよう裏工作だつてした。委員会に所属して功績を残せば将来いい職に就けるから、下級貴族のマリクは邪魔されたくないはずだ。

どうだとばかりに今までしてきた嫌がらせの数々を並べ立てたが、アーネストは深く頷くばかり

で、憤慨する様子もない。

「やっぱり優しいじゃん」

「どこが!? 話通じてます!? あっ、そうだ。課外授業で地面が芝生の時は、足をひっかけて転ばせたりもしたんですよ!」

「そういうとこだよ。普通は嫌がらせする時にわざわざ相手のダメージが少なくなるようシチュエーションに配慮しないでしょ。教科書を破かれた後に寮に帰ると、新品の教科書とお詫びの図書券が置いてあるって喜んでたし、下駄箱の手紙の半数はやかみのカミソリレターだから、どっちみち読まずに全部捨ててるよ」

「で、でも委員会は……」

「マリクは委員会に入りたかったわけじゃなくて、単純にその日早く帰りたくて仕方なく手を上げてただけだったつてさ。引き受けなくて済んでラッキーって笑ってたけど」

ガーン、と衝撃が走る。そんなバカな。

「そもそも、なんで教科書買って贈っちゃうかな」

「だ、だってないと授業で困るし、先生に叱られるから……」

「そういうとこなんだよな」

アーネストはかわいくてたまらないという顔で、俺の頭を撫で繰り返した。今までアーネストにそんなことされたことがない俺は、びっくりして固まってしまふ。

「あーかわいい、ほんつとかわいい。こんな子猫の悪戯いたずら以下のことで断罪されるとか、シナリオ担

当がやつつけすぎる。いやむしろよくやった? 推しの魅力全開で尊すぎ?」

またしてもアーネストが訳のわからんことを早口で喋るしゃべ。シナリオ担当ってなんだ? 『推し』ってなんだ?? やっぱり正気じゃないんじゃないか、コイツ。

頭を撫でられてすっかり毒気を抜かれた俺だったが、いやいや流されちゃイカンとハツとする。追いかけてくる手から逃れるべく距離を取った俺に、アーネストは心底残念そうな顔をしたが、情けは無用だ。気軽におさわりするんじゃない!

コイツが普通の状態じゃないのは確かなんだ。アーネストは間違いなくこの十数年間俺を嫌っていた。それだけは疑いようがない。それなのに、今はこいつはことあるごとにかわいいかわいいと連呼して、俺を愛めでようとする。これがまともなわけがあるか。

「そもそも! アーネスト様はずっと私を嫌っていらっしやいましたよね?」

「そんなことないよ! 俺はデモの第一印象から決めてました。攻略対象じゃないって知った時は絶望したからね。レニたんルート作るために制作会社を買収しようとしたもん。お待たせレニたん、溺愛ルートです」

「あーもー、なに言ってるかわからない!!」

コイツほんとなんなの!? 以前のクソムカつくアーネストが恋しいままである。少なくともあの頃はまだまだもうちょつと意思疎通ができてたからな。

「とにかく、茶番はもうたくさんです! あなたがこの十一年間私にできた言動が好意からくるものだなんて、私には到底思えません! ろくに会話らしい会話をしたこともないし、パーティー

のエスコートもいっつも嫌そうで、プレゼントどころかお返しのカードすらくれなかった。それがあなたの愛情表現ですか？ そんなのなら、愛なんか要りません！」

俺がやけっぱちになって洗いざらいぶちまけると、アーネストは切れ長の目を睨にらって俺を見た。どうだ、怒ったか？ でも、俺にだって積年の恨みってもんがあるんだ。血の滲にじむような王妃教育、周囲の嘲笑ちやうしやう、好きな人に顧みられることのない惨めな日々……思い出すだけで涙が滲にじんでくる。「今更、もうなにもかも遅すぎるんですよ！ もう私はアーネスト様と婚約したがっていた昔の私じゃないんです!! きっぱり婚約破棄してくださいませんから、もう放っておいてください!!」

不敬と咎とがめられようが、教会行きを決めた俺にはもう失って困るものなんてなにもない。たとえ逆上して殴られたとしても、それで綺麗さっぱりコイツとの縁が切れるなら、願ったり叶ったりだ！

「レニたん、ごめんね……ごめん……本当に遅すぎたね」

一気に言い捨てて肩で息をしていた俺は、息を呑んでアーネストを見つめた。

アーネストが俺に謝ったことなど、今まで一度もない。おまけに、その目からはポロポロと大粒の涙が流れていた。あのアーネストが人前で涙を見せるなんて。

壁に徹していた使用人や護衛たちも、俺たちのやりとりに動揺し、身を硬くしている。

アーネストはよろよろと立ち上がり、近づいてきてそっと俺を抱き寄せた。

「今までレニたんを傷つけて悲しませたこと、俺は一生かけて償うよ。絶対にレニたんを幸せに

するって誓う。君が望むことならなんだって叶えるし、なんだって捧げる。世界の半分だつてあげる」

世界の半分つてなんだよ。いらねえよ、怖すぎるよ。償いなんていらぬから、さっさと俺を自由にしてくれよ。

そう思うのに、超絶美形の涙つて本当にずるい。間近で見せつけられて甘い言葉を囁ささかれたら、つい騙だまされそうになっちゃうじゃないか。自慢じゃないが、俺はちよるい自信があるんだぞ。

「……私は、なんにも要りません。償いも結構です。さつきはいろいろと恨み言を言いましたが、本当は誰よりもわかっているんです。私が嫌われていたのは、あなたにふさわしい人間になれなかったせいだつて。だから、もう終わりにしましょう。そのほうがお互いのためなんです」

今更いい子ぶるつもりはないが、本心だつた。アーネストに愛されるには、俺は出来が悪すぎた。それは事実だから。

長年かけてねじくれまくったこの感情がどうしたら清算されるかなんて、俺にもわからない。だけど、これだけははっきり言える。俺はもうアーネストを愛してない。今になって愛だの償いだのと言われたつて、それは俺にとつて苦痛でしかないんだ。

「ごめんねレニたん、レニたんのお願でもそれだけではできない。レニたんのためなら死んでもいいと思うぐらい愛してるけど、俺が死んだ後レニたんに触れる男がいるのは許せないから、殺して回らなきゃいけないっちゃう」

なっちゃう、じゃねえよ！ なんてやりたくないけど仕方ないみたい言い方してんだよ！

「ご安心ください、アーネスト様。私はアーネスト様とお別れした後、学園を去って教会に入りませ。修道士には結婚は許されておりませんから、他の方と婚姻することもありませんし、純潔を失うこともありません」

「教会が一番ダメなやつだから！ あんなどこ飢えた男共が蔓延る縦社会の閉鎖空間だよ!? レニたんみたいに騙されやすくして流されやすくしてフンワリしたかわいい子なんか、一瞬で剥かれて凌辱の限りを尽くされちゃうよ!?」

「教会をなんだと思ってるんですか!？」

「飢えた男共が蔓延る縦社会の閉鎖空間だよ!」

「神に仕える敬虔な信徒の方々が集う神聖な場所です!」

コイツ本気でどうなってるんだ!? 何をどうしたら教会がそんな爛れた恐ろしいところになるんだよ!

「とにかく、教会は絶対にダメ。婚約破棄もしない。俺は絶対に許さないから」

悔しいが、この国において権力者であるアーネストの言葉は絶対だ。たとえ俺がどんなに望んでも、王太子の恨みを買ってまで俺を受け入れてくれる教会など、どこにもないだろう。なにを理由にアーネストが教会に偏見を抱いているのかは知らないが、こいつが「ダメ」と言う限り、俺の穏やかな修道院生活は永遠に叶わないのだ。

「ひどい。どうして私を困らせようとするんですか。願いを叶えてくれるなんて、嘘ばかり」

ぼろぼろと涙がこぼれる。ほんとにひどい。どれだけ俺を振り回せば気が済むんだ。俺は贅沢な

ことはなにも望んでない。ただ、誰にも陰口を叩かれず、心穏やかに暮らしたいだけなのに。

「泣かないでレニたん。我儘言つてごめんね。絶対大事にするし、もう二度と悲しませないって誓う。レニたんのことはなにかあっても必ず守るから、もう一度だけ俺にチャンスちょうだい」

そう言つて、アーネストはペロリと俺の涙を——舐めた。生まれてこの方、軽い口づけすらしたことのないこの俺の恥を、一切の躊躇なく。舌でペロンって。

(コイツほんと——マジでなんとかしてくれよ)

現実を受け止める許容量が限界に達した俺は、ショックのあまりそのまま意識を失った。

異世界転生を絶賛エンジョイ中の王太子、アーネストです。

レニたん断罪イベントの真っ最中に前世を思い出した俺は、現在進行形で浮かれまくっていた。あの婚約破棄ギリギリのタイミングで、自分が『君アル』の世界に転生して、ゲームのメインヒーローであるアーネストになっていると気づいたなんて、一体前世でどれほどの徳を積んだのか——と思うものの、実のところそんなに大した人生は送ってない。どちらかというと、徳ではなく執念のほうがありえそう。

俺がまだ地球という星の日本って国で生きてた、いわゆる前世。俺はレニオール・ノクティスの大大ファンだった。十八禁BLゲーム『君が望むアルカディア』こと『君アル』のデモ動画を見た時から、一筋にレニたんを推し、生活のすべてを捧げていたといっても過言じゃない。

自慢じゃないけど、俺はかなりいいとこの生まれで、イージーモードの人生送ってたと思う。たいてい努力しなくても大抵のことは人並み以上にこなせて、見た目もよかったからめっちゃくちゃモテた。誰からもちやほやされて、このまま親父の跡を継いで勝ち組な人生送るんだろうなー、みたいに思っていた。

そんな俺の人生設計が、トラックに突っこまれた一秒で終わった。いやほんと、一瞬すぎてビツクリしたよ。そのまま死ぬたらかある意味楽だったのかもしれないけど、俺は生きていた。二度と立てなくなったけど、それを除けば生きるのに何の支障もない。

だけど、俺の周りにいた人間はほとんどいなくなった。笑うよね。つまり、跡継ぎになれなくなった俺に用はないってこと。直後はそれなりにシヨックを受けたし、凹んだり恨んだりもしたけど、一番衝撃的だったのは、そこまで寂しいとも思っていない自分に気づいた時だった。

で、ストーンと腑に落ちた。なーんだ、俺じゃんって。俺が、誰のことも大事になんて思ってなくて、どうでもいいヤツらと思ってたから、誰かの『どうでもよくないヤツ』になれなかった。そりゃしゃーない。

一人になって、よかったこともあった。それは、もう誰の評価も気にしなくていいってこと。みんなの考える『俺らしい』に拘ることなく、好きなことを好きなだけやっていい。実はゲイで腐男子でゲオオタで、隠れてBLゲー網羅しまくってたことかも、もう隠さなくていい。

そう開き直ってからは、入院生活も天国だった。部屋は個室だし、誰に気兼ねすることもない。新作BLゲーを求めてネットにダイブしまくり、そこでレニたんと運命的な出会いを果たしたのだ。動画で出てきたレニたんは、セリフは一言だけだったけどそりゃあもうかわいくて、強がってる内気なハムスターみたいな雰囲気かたまらないキャラだった。俺は一目で推しと定めて、発売日を首を長くして待っていた。そんな俺が、なにをどうやっててもレニたんを幸せにできないと知った時の気持ちといったら、もうね。絶望しかない。

レニたんはアーネストルートに入ると、アーネストに理不尽な目に遭わされ、不幸な境遇から主

人公のマリクにちよっかいを出し、婚約破棄される。ライターの意図はどうあれ、本当にめっちゃくちゃ理不尽にしか見えない。

トゥルーエンドだと修道院に送られて、神父とか偉い枢機卿すうききやうとかに慰み者にされるし、グッドエンドでも貴族の後妻として嫁がされ、まあお察しのひどい目に遭わされる。

あまりのスチルのエロさから、「ある意味ユーザーへのご褒美」とか「あんまりにも可哀想すぎる」という声がSNSで多く上がり、レニたんは攻略対象外にもかわからず、それなりに人気のあるキャラだった。

そこで、俺は手持ちの資産で『君アル』制作会社を買収することを思い立った。これは全世界のレニたんファンの総意である。ないのなら、作ってもらおう、レニたんルート。ポリウムマシマシのファンディスクでもいい。筆頭株主になってデカイ声で叫べば、夢は叶う。これが金と権力の正しい使い道ってやつだ。

世界観は中世なのに季節感とイベントだけは日本そのままな『君アル』。なのに、レニたんの水着もクリスマスドレスもバレンタイン衣装も提供されない現実には、俺は血の涙を流した。あの日々が報われるのなら、いくら金を積んでも惜しくない。

でも、そんな俺の夢は叶わずに終わってしまった。『君アル』の制作会社の別レーベルが出した正統派RPGが大ヒットした結果、株価は跳ね上がって俺は大儲け。自分に転がりこんだはずの次期当主の座が脅おびやかされることを恐れた弟に、事故を装って殺されてしまったんだ。

俺は、心底心残りだった。

(あとちょっとで、レニたんは幸せになるはずだったのに。俺が幸せにしてあげたかったのに)

それだけを思って死んだ結果、俺は見事『君アル』世界のアーネストとして生まれ変わったってわけ。

断罪される寸前の、レニたんのキラキラした瞳。それを見た瞬間、すべてを思い出した。なんのために、俺は生まれてきたのか。俺のすべきことはなんなのか。

クソみたいな断罪してる場合じゃない。レニたんを幸せにしなくては。今までのアーネストの悪行を思い返すと、我ながら殴り殺したくなるけれど、俺が死んだらレニたんは教会監禁性奴隷ルートか後妻凌辱ルート一直線である。

ここは『なんでもありのBLファンタジー世界』だから、男でも普通に子供を生める。そんな特殊設定でもなきや、一国の王子が男と結婚なんてできない。それなのにそんな目に遭ったらレニたんは……ゲームでは直接書かれてはいなかったけど、察してあまりある。そんな未来は、絶対阻止しなくてはならない。

絶対に俺がレニたんを幸せにする。それでもって、俺がレニたんの笑顔が一番傍で見たい。あわよくばエロいこともしたい。

虫がよすぎるかもしれないけど、ほんと、本気で頑張る。この口調もできるだけ直せるように努力する。レニたんを煩こわせるすべてを木こっ端は微塵みじんに片付けるから、ちよっただけ待っててね。

「よし、国外行こう」

サロンで気絶した俺が、自室のベッドで目を覚まして一番に思ったことがそれだった。あの故障中の王太子から逃れるためには、それしかない。

幸い、隣国は母上の故郷だけあってツテがある。こっそり目立たない場所に身を隠すぐらいはできるはずだ。善は急げ。俺は身支度を整えて、母上の部屋を訪ねていった。

「後生ですからお願いします。どうか俺を助けると思って、口を利いてください」

「だーめ」

部屋に入るなり必死に懇願する我が子の切なる願いを、母上は笑顔で一蹴した。ひどい。

「お願いします！ この通りです！」

「だめです！ あなたはアーネスト王太子殿下の婚約者なのよ。そんなことできるわけがないでしょう」

「そこをなんとか！」

「いけません。次期王太子妃が姿を晦ませるなんて、その後お父様が陛下からどのようなお叱りを受けるか。まして、私の母国ファンネを逃亡先に選ぶなど、もし明らかになった時、国家間の関係

に悪影響を与えます。貴族の婚姻は契約。個人の好き嫌いで反故にするなど言語道断。隣国に行きたいなら、きちんとアーネスト様との関係にケリをつけてからにさい」

正論すぎてぐうの音も出ないとはこのことだ。コテンパンにされた俺は、トボトボと母上の部屋を立ち去ろうとする。

「でもまあ……この長期休暇中に息抜きに行くことくらいは認めましょう。あなたも王太子妃になつたら、おいそれと旅行もできないでしょうからね」

「本当ですか!？」

俺は目を輝かせて、一も二もなくその話に飛びついた。

たとえ夏休みという期間限定であっても、一ヶ月近くこの国から逃げ出せるのはありがたい。家で過ごす休みも嫌いじゃないが、『あの』アーネストが、いつまた屋敷に押しかけてきて、砂でも吐きそうな愛の言葉を投げかけながら不埒なことを仕掛けてくるかわからないのだ。

もしそれが、休みの間ずっと続いたら？ エスカレートしてどこか旅行にでも連行されてしまつたら？ ……恐怖しかない。

モラハラもパワハラも最低最悪だったが、現状セクハラが一番シヤレにならないのだ。万一既成事実でも作られた日には、俺は永遠に逃げるチャンスを失う。離れている間にあいつが正気に戻り、俺への執着を失うことに一縷の望みをかけて、一刻も早く逃げ出さなくては。

俺はメイドに旅支度を頼み、必要最低限の荷物だけを抱えて一人で馬車に乗りこんだ。

馬車の旅は快適だった。車内から外の景色を楽しんだり、本を読んだり、気ままに過ごす時間は

最高に贅沢だ。夕暮れ時になれば、道中にある親戚の屋敷や、警備のしつかりした宿屋に身を寄せ、地の物やワインに舌鼓したづみを打つ。

その日も、街のちよつといい宿の食堂でワインと食事を堪能しながら、俺はいい気分になっていた。

「あゝ、最高。もう帰りたくない……」

「それは困るなあ。レニたんがいないと寂しくて死んじゃうよ」

唐突に耳元で囁かれ、全身にぞわわわつと鳥肌が立つ。おそろおそろ振り返ると、申し訳程度に変装したアーネストが、満面の笑みを浮かべて背後に佇たたずんでいた。

「な、なな、なんでここが。どうしてここに」

「来ちゃった!」

（そんな語尾にハートマークでもつきそうな言い方しても、ぜんっぜんかわいくない! ていうかコエーんだよ!!）

そんな俺の心の叫びがコイツに伝わるはずもなく、アーネストは当たり前のように俺の向かいの席に腰を下ろし、料理とワインを注文している。運ばれてきたグラスを一方的に俺のグラスにぶつけ、陽気に「カンパーイ!」と叫ぶアーネストを半目で見つめながら、俺はこの休暇が天国から地獄と化したことを悟った。

話を聞くと、コイツは俺が家を出たその日に訪ねてきて、俺が隣国で夏休みを過ごすことを知っただらしい。

俺は、アーネストに足取りを悟られないよう、あえて予定を立てずに旅をしていた。そこでアーネストは、各地に身を潜めている王家の影のネットワークを使って俺の情報をかき集めたらしい。

連絡を待つ三日の間に徹夜で仕事を片付け、俺の行方を掴んだと同時に城を飛び出して、馬車を夜通し走らせてきたというから驚きた。

（信じられない……なんて執念深くて手段を選ばないヤツ）

サラッと口にはしているが、王家の影なんて、そう簡単に私用で使っているものじゃない。それに王太子という身分にある人間が、少人数の供しかつけずに国を離れるなんて許可されるわけがないのだ。一体どんな無茶をここにやってきたのだろう。

「マジか……やばいよー、絶対アーネストじゃなく俺が叱られる。また王宮官吏の人たちに嫌味言われちゃうよ。最悪だ……」

王宮の官吏たちも例に漏れず、優秀な王太子の婚約者でありながら特に秀でたところのない俺のことを快く思っていない。アーネストが無茶をした原因が俺であると知ったら、きつとここぞとばかりに叩かれてしまうだろう。想像するだけで、胃のあたりがシクシクと痛む。

「大丈夫だよ、レニたん。もう誰にもなにも言わせないし、レニたんの心を悩ませる羽虫は一匹残らず駆除するから。それまでの間、王妃教育はお休みにしておくからね」

誰のせいだと思いはするが、しばらく王宮に行かなくていいのは純粹にありがたかった。単なる口約束かもしれないけど、少なくともこの休みを憂鬱ゆううつな気持ちで過ごさずに済む。

「でも、なんでそこまでして俺なんかを追いかけてきたんですか? 王都でマリクと遊んでいれば

いいのに」

「マリクとはそんな関係じゃないよ。レニさんに誤解させるようなことした俺が悪いんだけど、俺とマリクは別に恋人とかそういうのじゃなくて、半分以上利害の一致で繋がってただけなんだ。こないだのダンスパーティーでぶん投げて怪我させちゃったから、その分も込みで慰謝料を払ったし、今後は周りに誤解されるようなことはやめようってことで話もちゃんとしている」

「はあ!? 誤解って、そんなわけじゃないでしょう!!」

あんなに幸せそうな顔で笑ってイチャイチャしてたくせに、あれが演技だなんてとても信じられない。

「すぐには信じてもらえないかもだけど、本当だよ。俺が好きなのはレニさんだけ。もう二度とマリクと接触することはない。これはその念書」

目の前に差し出された書類には、契約が完了したことと、支払いを受領したこと、今後お互いに関わりを持たないことに同意する旨が記載されていた。これに反した場合、アーネストは王太子の地位を返上することとなり、マリクは命をもって贖うとされている。二人の署名と王家の承認印がある、きちんとした契約書だ。

「これ、レニさんあげる。もし俺がまたマリクに近づいたり、マリクのほうが俺に近づいてきたりしたら、公爵に渡していいから」

この契約書を父上に渡したら、この文面に記載された事態が起きた場合、即座に使用するだろう。もし陛下がアーネストの王太子位剥奪を渋ったとしても、押し通すだけの力が父上にはある。まさ

か、本当にマリクと別れたというんだろうか……?」

「別に、いらぬです。私は婚約破棄してただければ、それで」

「婚約破棄はしない。これは『俺がマリクと完全に切れていて、今後もレニさんに誤解されることはいらないです』ってことをレニさんに保証するための念書だから、受け取ってほしい。帰ったら俺が万一浮気したり、レニさんを悲しませたりしたら然るべき報復を受けるっていう誓約書も作るね。そっちは、二人で話し合って内容決めよう?」

「き、決めるってなにを?」

「レニさんが俺に望むことと、破った時の罰とか。要求が百個、いや千個になってもいいし、ペナルティもレニさんが納得する内容にしたいよ。指何本欲しいとか」

「ゆっ、指なんかいらぬです! 恐ろしいこと言わないでください!!」

「婚約破棄と離婚と別居と夫婦生活の拒絶以外はなんでも書いていいから」

それを封じられたら、実質俺の望みなんて一つも叶わないも同然なんだが、今の状態のアーネストになにを言っても聞いてもらえないに違いない。俺は渋々アーネストから渡された書面を懐にしまった。

(ううっ、こんなやばい爆弾みたいな契約書、旅行中ずっと持っていたくない……!!)

押し寄せるプレッシャーから逃れるように、俺はワインを呷る。酒でも飲まなきゃやってられない。人の気持ちも知らずに「おっ、レニさんいい飲みっぷり!」などと嘯し立てるアーネストを、俺はキッと睨みつけた。

「せめてそのレニたんつていうの、どうにかならんんですか？」
「どうにかつていうと？」

「だから、『たん』とかつけないでください！ 恥ずかしくないんですか!？」

酒の勢いで不敬な言葉をぶつけるが、アーネストはきよんとした顔で俺を見ただけだった。そして、少し考えた後に、コテンと首を傾げて上目遣いで俺の顔を覗きこむ。

「じゃあ、レニつて呼んでもいいの？」

(はあああああ!? なんだそのリアクション!)

その破壊力は凄まじかった。心臓を思い切り撃ち抜かれて、俺は手の中のグラスを割れそうなほど力いっぱい握ってしまう。

「いつ、いいわけしないでしょ！ 気安く呼ばないでください！ それぐらいなら、『たん』づけのほうはまだマシです!!」

落ち着け、俺。平常心だ。

葛藤と闘いながらグラスの中のワインを一気飲みする俺に、アーネストは「えー」と名残惜しそうな声を上げている。やめろ、思わずかわいいとか思ってしまうじゃないか。

なにを隠そう、俺はワンコ系男子に弱いのだ。正確に言うと、ワンコが大好き。隣国のおばあさまのお屋敷で飼われていたアポロというボーダーコリーに魅せられて以来、バチバチの犬派。猫ももちろんかわいけれど、大きな体で慕ってくれるのが最高に癒やされる。

アポロは黒と白のふわふわの毛並みで、とても人懐っこくて優しい目をしていた。まるで人間み

たいに賢いアポロは、アーネストに冷たくされ、周りの貴族令息・令嬢たちにもバカにされて傷ついていた俺に、『大好き』を全身で浴びせて慰めてくれたんだ。

幼い俺はすっかりアポロに夢中になり、長い休み中ずっとその子と一緒に過ごした。帰国の時は別れがたらくて大泣きし、帰りたくない駄々を捏ねたのを覚えている。

俺は母上に犬を飼わせてほしいとお願ひしたが、王妃教育でスケジュールギリギリの状態では、ろくに面倒も見られないとすげなく却下されてしまった。番犬として飼われている犬で我慢しなさいと言われたけど、そういうんじゃないんだよ……確かにあの子たちだつてかわいくないわけじゃないけど、いつもお仕事モードで周囲への警戒バリバリ。目つきも鋭くて、気安く俺と遊んでくれないのだ。

とても残念だったけど、母上の言う通り、俺は王妃教育のために一日のほとんどを王宮に拘束されていて、わずかな時間しか一緒にいられない。飼い主に構ってもらえずに寂しい思いをさせてしまうのは可哀想すぎる。俺は泣く泣く諦めて、いつか自分だけのワンコを飼いたいと憧れ続けた。

俺の婚約破棄計画の中にその願望はしっかりと組みこまれ、お布施次第で犬を飼っても許してくれる教会や、かわいい子犬を譲ってくれるところもリサーチしていたんだ。それをぶち壊してくれ張本人に、こうしてまとわりつかれているわけだが……

「そんなこと言わないでさあ、いいでしょ？ レニ」

こいつは狡猾だ。かわいこぶつて見せてはいるが、俺がその仕草に弱いのをひと目で見抜いて追

い打ちをかけてくる。そういうのは、あざといというのだ。決してワンコのようなピュアな気持ちではないわけで、そんなのじゃ俺は、俺は……………

「たっ……たまになら、いいですけど。ほんとに、たまにだけですよ!」

「もちろん!! ありがとうレニ!」

くそう。なぜだ。アーネストの頭に架空の犬耳が見える。しかも美しい。

散々俺を冷遇し続け、いきなり手のひら返してストーリーカーしてくるような男のくせに……ほんと、一体どうしてこうなった!?

翌朝、アーネストは俺とともに公爵家の馬車に乗りこんだ。

王宮の馬車は他国じゃ目立つし、かえって危ない。その点、ノクティス公爵家の馬車はこのあたりでも知られているし、元王女だったおばあさまも庶民派で人気があるからなにかと安心だ。……ほんつつつとうに不本意だけど、仕方ないからな!

執拗しつように隣に座りたがるアーネストとの攻防は一応俺が制して、なんとか向かい側の席に追いやることに成功したわけだけど、ずーっとガン見してくるアーネストの視線を真正面から受け続けなきゃいけないのは、これはこれできつい。

でも、身を守るためには絶対に隣に座らせてはいけないと、俺の第六感が警鐘を激しく打ち鳴らしているから、逆らうわけにはいかないのだ。ひたすらに本に目を落として、意識からコイツの存在を完全にシャットアウトする。

「いい天気だよ、レニたん。綺麗な花が咲いてる」

俺のそんな苦勞を知ってか知らずか、キレそうなほどウキウキとアーネストが声を掛けてくる。俺だって外の景色を楽しみたいが、お前はヤなんだよ。どうしてそこを汲くんでくれないかな。

「もう少し行ったところに、川沿いの町があるんだ。小さいけど運河もあって、船に乗ることもできるよ。そこに着く頃には昼近くなるから、そこでおいしいものを食べよう」

それは俺にとっても魅力的な提案だった。俺は船も魚も好きだし、ちょうど馬車の中で座っているのにも飽きが来ている。今日は陽気もいいし、船の風はきつと気持ちがいいに違いない。

「……半径六十センチ以内には近寄らないで、私に指一本触れないと誓ってくれるなら、いいですけど」

「六十センチかあ。なかなかシビアな条件だけど、船の大きさと状況が許す限り善処するよ」

疑わしくはあったが、一応言質は取ったと自分を納得させ、俺は船遊びとおいしい昼食に思いを馳はせながらニコニコと窓の外を眺めた。

「レニたんのご機嫌な笑顔、マジかわ……」

向かいでまたアホがなにかブツブツ言っていた気がするけど、そこは綺麗に無視してやった。

太陽がますます光を強めてきた頃、馬車はタナティアという小さな町に到着した。

小さな、と言っても、普通の村と比べれば店の数は段違いだし、^た辿れば王都の運河まで繋がっているだけあって、なかなか栄えている。そこそこの知れた名所ではあるのだが、俺が訪れるのはこれが初めて。陸路のほうに懇意にしている親戚がいるから、普段はどうしてもそっちに行ってしまうんだよな。

自慢じゃないが俺は、ほとんど自分の足で街を歩いたことがない。

箱入りと言うと聞こえはいいが、実際のところは王妃教育が死ぬほど忙しくて、そんな暇がなかっただけだ。つまり、半分はこいつのせい。

残りの半分は、俺の父上と兄二人が尋常じゃなく過保護なせいだ。貴重な外出時には必ず誰かが張りついてきて、完璧に面倒を見てくれる。本音を言えば、もう少し自由にさせてほしいんだけど、腐っても王太子の婚約者という身分で、フラフラ一人歩きしたいなんて望むべくもない。

「すごい。なんだか目移りしちゃいますね」

「そうだね、レニ。はぐれると大変だから手を繋ごうか？」

「オコトワリシマス」

さりげなく距離を詰めるな！ 油断も隙もない。俺は華麗に身を翻し、半径六十センチのパーソナルスペースを守るべく、アーネストから距離を取った。

「レニ！」

「えっ？」

突然アーネストが強い声で俺の名を呼び、腕をぐいつと引く。抵抗する暇もなく、俺はアーネ

トの腕の中に抱きこまれた。

「うわっ、なにす……っ」

抗議の声を上げようとした瞬間、さっきまで俺が立っていた場所を、四頭立ての大きな馬車もものすごい勢いで駆け抜けていった。馬車が切った風が背中当たり、その近さをひしひしと伝えてくる。もし少しでもかすっていたら、無事では済まなかっただろう。

「危ないから、気をつけて」

「は、はい……」

（これって……助けてくれたんだよな？）

アーネストに助けられるなんて、これが初めてだ。別に今更なにか期待してるわけじゃないけど、助けられたのは事実なので、無下にはできない。ちょっと嬉しいなんて思うのは、気の迷いだ。きつと。

轢かれそうになった恐怖が過ぎ去ると、自分の状況がじわじわと理解できてきた。俺を守るように回された力強い腕。密着した胸元から香る、ムスクのような甘い匂い。

（いいにおい……筋肉すごいな、やっぱ鍛えてんだ。あと、体温思ったより高いんだな）

心地よい香りに、思わず鼻を鳴らしてくんくんしてしまいそうになり――

（はっ、今俺は一体なにを!?）

正気に戻った俺は、慌てて体を離そうと身を振るが、がっちり抱きこむ腕はピクリともしない。

「あ、あの……もう大丈夫ですので、離してください」

「もう？ 残念」

アーネストはちよつぴり口を尖らせる。まただ。見たことない顔。名残惜しそうに俺のつむじに鼻先を擦り付けてから、そつと体を離していく。

そういうの、マジでやめる。今更俺の燻った気持ちを起こそうとするな。全部消すのに十年かかったのに。

「お腹すいたね。そろそろ行こうか」

アーネストは俺を腕の中から解放する代わりに、そつと手を繋いでくる。接触禁止のルール違反だろと思うが、振り払う気にはなれなかった。

(やばい。俺、ほんとチョロすぎない？)

ちよつと庇かばわれたぐらいで流されちゃダメだ。

突然立ち止まってしまった俺に、アーネストが振り返る。

「どうしたの？」

小さく首を傾げて微笑むアーネストに、知らず頬が熱くなった。

「……なんでもない、デス」

アーネストは頷いて、楽しそうに笑っている。

(これは、あくまで迷子防止、事故防止——自分の安全のためだから！ 決して、近くにいと安心するとか、そんなんじゃない。絶対に！)

そう自分に強引に言い聞かせ、俺は再び歩き出した。

アーネストに手を引かれたまま街の中を進み、俺たちは飲食街まで辿り着いた。

だいぶ空腹になっていたこともあり、昼食を摂れそうな店を探したが、これがなかなか難しい。店はたくさんあるのだが、こちらの条件がキツすぎる。

アーネストが店に入るとなれば、必ず護衛もついてくる。食事をするのは俺とアーネストの二人だけとはいえ、昼時の店はどこも混雑していて、護衛が控えるスペースが確保できない。高位貴族の外出は、休憩場所を事前に予約しておくのが普通だ。アポなしで飛び込むのは無理がある。

「うーん、わかっていたけど、なかなか厳しいねえ」

「そもそも、王都のような貴族向けの店自体が少ないですからね。もちろん、あつたとしても国外で身分を明かすわけにはいきませんが……」

アーネストは頷くと、再び俺の手を引いた。

導かれた先は、飲食街ではなく大きな広場だった。等間隔に設置されたベンチでは大勢の人たちがくつろぎ、その周りにはたくさんのお店や出店が並んでいる。変わったパンや肉、お菓子など売られているものは様々だが、どれもいい匂いを放っていて、空っぽの胃が刺激された。

「たまには屋台メシってのもいいもんだよね。レニたん、屋台平気？」

「えっ、はっ？」

唐突に問われ、俺は間抜けな声を上げた。俺だけじゃなく、護衛の人たちも驚いて目を丸くしている。

アーネストは昔からマナーや立ち居振る舞いには、小姑こじょうとかよつてぐらいうるさい男だった。それが自分から屋台メシを提案してくるなんて、どういう風の吹き回しなのか。

「えっと、だ、大丈夫なんですか？」

「大丈夫ってなにが？」

「いやだって、屋台ですよ？」

「うん、俺屋台メシ大好き」

アーネストはニコニコしながら答える。王太子がそう言うんだから、逆らえるはずもないし、突っこむヤツもない。心なしか護衛たちから「さすがに得体の知れない店で売られたものは……」と縫るような視線を感じたが、俺は屋台メシに興味津々だったし、とにかく空腹だった。

「……私も、食べてみたいです」

俺の答えを聞くなり、アーネストは屋台へと駆け出していく。なんというフットワークの軽さよ。慌ててアーネストの後を追いかける護衛たちを、俺は黙って見送った。

「レニオール様、あちらへ参りましょう」

俺の傍に残った護衛が、空いているベンチに俺を促す。自分も屋台に並んでみたい気持ちはあつたが、食べる場所を確保しておいたほうがいいに違いない。俺はベンチに腰かけて、アーネストが屋台で買っている姿を眺めていた。

アーネストは意外にも慣れた様子で、屋台の人が食べ物や紙を紙に包んだり会計したりしている間、フランクに雑談している。もしかして、マリクとデートで屋台に行ったりしたんだろうか……そう

思うと、胸の中にモヤモヤしたものが湧き上がってくる。

(いやいやいや！ もう関係ないだろ！)

ぶんぶんと首を振って、俺は自分の中の嫌なものを振り払う。

(なにがモヤッ、だよ。バカバカしい。あいつは俺の中で終わった男だろうが！ むしろいなくなつてほしい男ナンバーワンなんだぞ)

もつとポジティブに考えよう。生徒会長と王太子の執務で多忙を極めるはずのあいつが、時間を工面して何度も下町デートに行くぐらいなんだ。別れたようなことを言つてたけど、そう簡単に想いが消えてなくなると思えない。

今はなにかの間違いで俺をレニたんなどと呼んで奇行に走っているが、きつとすぐにマリクに心を戻す。そうすれば、なにもかも俺の望み通りになるんだから……

「どうしたの、レニ。お腹空きすぎちゃった？」

ちよつぱり沈んだ気持ちでぼんやりしていた俺のもとに、アーネストが戻ってくる。心配そうな顔を向けられ、俺は首を横に振った。

「なんでもないんです。ちよつと疲れただけで……それより、買いに行つていただきありがとうございます。ありがとうございました」

アーネストは、「無理しないで」と俺をいたわりつつ、買ってきた食べ物を差し出した。隣に腰掛けるアーネストに、また「六十センチールはどうなったんだ」と思ったが、食べ物を買つてきてもらつてそんなことを言うほど恩知らずではない。俺は黙って恩恵おんけに与ることにした。

「屋台で買ったものを食べるなんて、初めてです」

俺はまず串に刺さった肉にとりかかった。香ばしい香りが食欲をそそる。

(これは一体どうやって食べるべきなんだ?)

考えてみれば皿もナイフもフォークもない。それなのに肉は大ぶり、一口で収まりそうもなかった。

「食べてみると、結構おいしいよ」

アーネストは戸惑う俺をよそに躊躇なく串焼き肉に齧りつき、豪快に噛みちぎって咀嚼した。あれでいいのか。ていうか、やっていいのか。マナーという言葉を粉砕する食べっぷりだ。

目で促され、俺は思い切つて肉に齧りついた。ジュワツと甘辛いタレが溢れ出し、口の中いっぱい肉汁が広がる。めちゃくちゃうまい。肉の質としては普段ウチで食べているものより断然劣るんだろが、その分赤身の旨みがあるし、柔らかく食べさせる工夫も施されている。

これは多分、硬い肉を一度下茹でし、スパイスの効いたタレに漬けてこんで臭みを消し、それから網で焼いているに違いない。なかなか手の込んだ逸品だ。毎りがたし、屋台メシ。

「これはおいしいですね。一見粗野に見えて、丁寧な仕事がされています。タレの味付けも変に辛すぎず、癖がなくて食べやすいです」

「うんうん」

「こっちのパンも、素朴なようできて奥深いですね。噛めば噛むほど味が出るというのか、バターを使わず塩と砂糖のバランスと小麦の香りで勝負しているところに作り手の心意気を感じます」

「アハ、めっちゃ食リポするじゃん」

タマテバコやー、と言つてアーネストが笑う。タマテバコってなんだよ。

コイツの話がわけわからんのは相変わらずだけど、今までより嫌な感じはしなかった。むつつりと不機嫌そうに黙りこんで、腕を組みながら俺を疎ましげに睨んでいた頃より、ずっといい。

(イヤイヤイヤ、よくないよくない！俺はコイツと別れて自由なハッピーライフを手に入れるんだって！)

俺は激しく首を横に振り、気の迷いを打ち払う。

「なにやってるの？ レニ。パンくず、ついてるよ」

くすくすと笑いながら、アーネストが俺の口元に手を伸ばす。そして、俺の口元についていたパンくずを無造作に口に運び、そのまま食べた。

「うん、甘くておいしい」

ぺろりとアーネストが唇を舐める。

(えっ、今コイツ、なにやった？ 食べた？ 俺の口についてたやつを……?)

ぶわわわわわ、と顔に血が集まり、頬がカーツと熱くなる。

信じられない！ コイツ、コイツ……やつぱりやだ！

「わ、私はちよつと飲み物を買ってきますっ！」

顔を真っ赤にした俺は、喉の渇きと暑さを覚えて立ち上がった。このままここにいたくない。恥ずかしくて死にたい。ふざけんなバカ王子。もうほんと、ほんと、こんな人前になんてしてくれ

立ち読みサンプル はここまで

んだコイツはよ!

「あつ、レニたんちよつと!」

(うっせーバカ、レニたんちよつと! バカ! ばーか!!)

俺は呼び止める声も聞かず、心の中で罵倒しながら全力疾走した。

アーネストのアホ。気を抜くとすぐこうだ。俺の想像の斜め上を突っ切って、あいつは俺を困惑させる。それなのに学習しない俺もアホだ。嫌いな男にちよつと優しくされて嬉しくなってる自分も情けなくて嫌になる。

絶対、絶対気の迷いだ。そんなの、わかってるのに。

ふと気がつくと、広場から結構な距離離れてしまっていた。一人になりたい気持ちは変わらないが、そういうわけにもいかない。適当な屋台で飲み物を買って戻らなくては。

「えーと、飲み物、飲み物……」

慣れない道をキョロキョロしながら、飲み物を買っている店を探す。人も屋台もとにかく多くて、なかなかそれらしい屋台が見つからない。

「飲み物が欲しいの? だつたら、こちだよ」

声を掛けられて振り向くと、人当たりのよさそうな男が立っていた。平民にしては身なりがよく、そこそこ裕福そうなのが窺える。俺が警戒しているのがわかったのか、男は困ったように苦笑した。

「いや、ずーっと飲み物って眩きながらウロウロしてたからさ。困ってるのかと思って」

まさか、声に出していたとは……めっちゃくちゃ恥ずかしいやつだ、これ。

「そ、そうだったんだ。すみません、ご親切にどうも」

「謝ることはないけど、君一人で来たの? 明らかにお忍びって感じだけど……」
完全に見抜かれている。

今日は街に寄り道する予定じゃなかったから、いつもの服のままだった。着心地重視で選んだので装飾は少なめだが、素材の上質さは隠せない。少し目利きのできる者なら、俺が平民でないことは一目瞭然だろう。

「連れと供を待たせているんです。飲み物を買って戻らないと」

「それがいい。君みたいにかわいい子が一人でフラフラしていたら危ないからね」

かわいいか言われたの、身内以外では初めてだ。最近はいつてもよく言ってくるけど、なにをするにも大興奮で連発されるので、本気かどうかわからなくなってくる。アレはもしかしてバカにされてるんだろうか……?

「これでも男ですよ。まだ明るいし、危なくはないでしょう」

「そんなことないよ。油断すると悪いヤツらはなにをしてくるかわからないからね」

そういうものですか、と言おうとした瞬間、背後からすごい力で口に布を押し付けられた。ろくに声も出せないまま、二人がかりで路地の奥に連れていかれる。

「どうしたんだい? 気分でも悪くなった? 大変だ」

背後で俺の口を塞ぐ実行犯の男と、獲物の前に立って視界を遮る見張り役の男。見張り役の男は、わざと大きな声で心配そうな言葉を掛け、自分たちの犯行を周囲に悟られないようにしていた。完